

A-014「草蟲」(嘒嘒(ようよう)たる草蟲)『詩經』国風 召南

「あなたを見れば」

AKY訳

つれあい 追いかけて バッタが跳ねる

あなたに会えずに 私は悩む

あなたに会って あなたを見れば

悩みも消し 飛ぶ私の心

南山登って ワラビをとる間も

あなたに会えずに 不安な私

あなたに会って あなたを見れば

たちまち安らぐ 私の心

南山登って マメの芽摘む間も

あなたに会えずに 悲しい私

あなたに会って あなたを見れば

うれしさいっぱい 私の心

(原詩)

(読み下し文)

嘒嘒草蟲
趨趨阜螽
未見君子
憂心忡忡
亦既見止
亦既覯止
我心則降

嘒嘒(ようよう)たる草蟲(くさむし)
趨趨(てきてきて)たる阜螽(ふしゅう)
未だ君子を見ざれば
憂心忡忡(ちゅううちゅう)たり
亦既に見
亦既に覯(あ)い
我が心則ち降る

陟彼南山
言采其蕨
未見君子
憂心惓惓
亦既見止
亦既覯止
我心則說

彼の南山に陟(のぼり)て
言(こと)に其の蕨(わらび)を采(と)る
未だ君子を見ざれば
憂心惓惓(てつ)たり
亦既に見
亦既に覯
我が心則ち說(よろこ)ぶ

陟彼南山
言采其薇
未見君子
我心傷悲
亦既見止
亦既覯止
我心則夷

彼の南山に陟りて
言に其の薇を采る
未だ君子を見ざれば
我が心傷悲す
亦既に見
亦既に覯
我が心則ち夷(たいら)ぐ

「草蟲が二匹キイキイ鳴きあっているわ。あれ、今度はバツタがツガイで跳ねた。虫たちにだつて連れ合いがいるのに、私は、あの人に会うことができない。」

山にワラビやマメの芽を取りに行つても、私は上の空、心はあの人のことです。さびしくて、さびしくて。

でも、あの人を帰つてきて会うことができれば、悩みも何にもない。うれしくて、うれしくて。」

第一句は、虫が相手を追うさま、第二句、第三句は、草つみを通じて、思う人に会う喜びを歌っています。

摘んだ菜を道の脇に置くと、無事に帰つてくるといふ言い伝えがあつて、菜摘み、草摘みは、遠くに出かけている人の無事を祈る意味があるのだそうです。

「使われている言葉について」

- 嚶嚶(ようよう)、擬声語、虫の鳴く声。
- 草蟲、イナゴの類、つゆむし、くさむし。
- 趨趨、踊るように飛び跳ねるさま。
- 阜蝻、いなご、ぼった、はたはた。
- 仲仲、憂えるさま。
- 惓惓、憂えるさま。心が定まらないさま。
- 見、見る、会う
- 觀(あ)、人と会う
- 止、語調を整える語
- 降、落ち着く。
- 南山、召南の地の南の山、洛水に沿つて
- 嶠山、熊耳山など。
- 薇、マメの芽(注)
- 説、悦と同じ。よろこぶ。
- 夷、やすらぐ、よろこぶ。

(注)

薇について、この薇がどんな植物であつたのかについて、旧説では、ゼンマイ(ワラビ)としていたが、最近では、ノエンドウの仲間とする説も有力。ノエンドウについて、嶋田英誠さんによれば、「野豌豆属の葉と茎は、味が今日のとうみよう(豆苗・豌豆苗)によく似て、古代には著名な蔬菜であつた。生食も可能であり、またスープの具にもされた。蘇軾が詩に詠った元脩菜がこれであり、巢元脩が嗜んだのでこの名がある。同じ理由で一名を巢菜といい、今日の野豌豆属の一部の漢名に、それが遺っている。明代には、官により栽培されて、宗廟の祭祀に用いられた。若芽を蔬菜とするほか、種子を炒め物にして食い、また花を鑑賞するために栽培することあつた。」という。(跡見群芳譜。私もノエンドウ説を採用して、ここに、マメの芽と訳した。